

## 「心」と「ハート」—『茶筌髪』から 『其面影』へ

諫 早 勇 一

二葉亭四迷の『其面影』はその成立過程が複雑な小説だが、その原型とされる「未発表未完の小説」<sup>1)</sup>『茶筌髪』から『其面影』が成立するまでの間、彼が「心」ないし「ハート」という語に拘泥しつづけたことはよく知られている。たとえば、この小説は明治39年10月10日から12月31日まで東京朝日新聞に連載されたが、その連載開始の一月程前に書かれたと推測される内田魯庵あての書簡において、彼は〈今度朝日へ書く小説の題〉(岩波書店「二葉亭四迷全集」昭和39—40年、第7巻346頁。以下引用はこの全集により、Ⅶ-346のように記す)をつけあぐんでいるから選んでほしいと、いくつかの腹案を並べている。そこに並んだ題は〇という奇妙な印を冠して「二つ心」<sup>はあと</sup>「心くづし」<sup>はあと</sup>「心つなぎ」<sup>はあと</sup>「はあとくづし二つ巴」(Ⅶ-347)など大半が「はあと」という語を伴っているし、9月21日付の同じく魯庵にあてた書簡でも、二葉亭は〈いつそ一字題にして「心」とし之をハートと読ましたらドンナものか〉と問い、〈篇中の人物只女主人公のみハートありて其他は皆 Without heart 也〉(Ⅶ-347~348)と作品の意図にまで言及している。だが、こうした彼の腹案は〈都々逸文学中の語〉との魯庵の酷評からついて、〈そんなら「其面影」はどうでござらう〉(Ⅶ-348)と現在の『其面影』に落ち着く訳だが、この二葉亭の「心」<sup>はあと</sup>への固執は看過できない。そして、この〈篇中の人物只女主人公のみハートありて其他は皆 Without heart 也〉の発言は、明治38、9年に書かれたと推定される「手帳15」の「茶筌髪梗概」にその源をたどることができる。いずれにせよ、二葉亭の創作意図を考える上で、「心」ないし「ハート」という語はきわめて重要な語と考えざるをえない。

更に、完成された『其面影』をめぐっても、十川信介氏などは〈『其面影』の主題は、あくまでも「ハート」の有無であり、想実は従である〉<sup>2)</sup>と述べて、「ハート」の重要性を強調している。だが、『其面影』(及び『茶筌髪』)が論じられる時、頻繁に「ハート」という語が用いられてはいるものの、その意味が明確に定義されているとは言えない。論者は「心」ないし「ハート」と語るだけで、明確な意義づけを怠ったまま、いやむしろ意識的にその意味を混同させながらこの作品について論じてはいないだろうか<sup>3)</sup>。こうした観点から、本論では今一度『其面影』の成立過程をたどりながら、「心」及び「ハート」の変遷をあとづけてみたい<sup>4)</sup>。

さて、一般に「ハート」という語が初めてプランに現われるのは、前述の「手帳15」に書かれた「茶筌髪梗概」(以下「梗概」と略す)からだと考えられているが、それは岩波版全集におけるロシア語の不注意な訳(ないし誤訳)のせいであって、実はこの語は明治37、8年に書かれたと推定される「手帳14」に既に現われている。つまり、そこに書かれた「茶筌髪人物」(以下「人物」と略す)のロシア語のプランの中に日本語の「心」、英語の heart にあたる сердце という語が繰返し用いられているのだ<sup>5)</sup>。

この「人物」に登場する人物はいくつものヴァリエントがあって一定していないが、基本的には陸軍大尉の未亡人(雪江)と、キリスト教徒であるその女友達、その夫、更に理想主

義者の若い男という「梗概」に書かれた A, B, B, Γ の 4 つの型に収斂しつつある。そして、「梗概」では A が < Heart アリ > とされているのに対して, B, B, Γ はまとめて < Without heart > (VI-405) とされているが, この「人物」でもロシア語を注意深くながめると, A, B, B にあたる人物に似たような表現が用いられていることに気づく。

まず, 「梗概」の A にあたる大尉の未亡人雪江について書かれた次の文を見よう。

A. женщина страстная, сильная, не вполне развитая, но умеющая твердыми шагами идти вперед, одним словом, женщина с сердцем (VIII-313, なお下線は引用者, 以下同じ)

つまり, одним словом 以下は < 要するにハートを持つ女 > (с сердцем をそのまま英訳すれば with heart) と訳せる。ちなみに, この個所は岩波版全集では < 一言にして云へば, 怒りばい女 > (VI-397, なお傍点は引用者, 以下同じ) と訳されて, 肝心な意味が台無しにされている。岩波版全集に従ってこの文を最初から見れば, < 情熱的で, 勝負な, 充分には発達していない, しつかりした足取りで前に進むことが出来る > (VI-397) と肯定的な調子で性格づけがなされているのに, それが < 一言にして云へば, 怒りばい女 > では, одним словом (in a word) が何のまとめにもなっていない。この訳は単なる誤訳をこえて, 二葉亭自身の意図を大きく損うものと言え, これまで中村光夫氏などが何の疑問もなくこの部分を引用してきた<sup>6)</sup>のには驚くほかはない。

次に, その女友達(「梗概」では B にあたるが, 「人物」では B, ふぢなどと呼ばれている)だが, 最初は以下のように性格づけられている。

Подруга Бессердечная христианка, рассудительная, в сущности пустая, вялая. (VIII-312)

下線を施した形容詞は見ての通り, без (without) という前置詞と, сердце (heart) という名詞からできたものだ(スミルニツキイの「露英辞典」には heartless とある<sup>7)</sup>)。ちなみに, 岩波版全集では < 薄情な基督教信者 > (VI-397) となっている。

更に, その先では彼女についてこう書かれている。

B. жена его, религиозная, в сущности пустая, сухая, сердца нет. (VIII-313)

в сущности пустая < 本質的に空虚な——引用者訳 > という個所の共通性などこの二つの記述の類似性は明らかだが, ここでも最後にまた < ハートがない > と述べられている。しかし, 岩波版全集ではこの部分も < 実に冷めたく, からつぽで, 浮気もの > (VI-397, ついでに言えば, この三つの特徴づけがそれぞれどの単語の訳なのか, これでは見当もつかない) と訳されていて, 意味を大きく損っている。

最後に, 女友達の夫(「梗概」では B) は安西, 小野哲也などの名を持ったり, B と記されたりしているが, その性格づけはこうなっている。

Б. Скептик, не имеющий подпора. Богато одоренный природою. Человек с характером, *ambitious*, сердца у него нет, неумеющий жить. (VIII-313)

見ての通り、ここでも先に引用した彼の妻の性格づけに用いられたのと同じ表現（*у него <彼には>が挿入されてはいるが*）が使われている。即ち、*<彼にはハートがない>*のだ。（岩波版全集では*<情もなく>*，VI-397）

「梗概」のΓにあたる人物に関する部分には *сердце* の語は使われていないとは言え、以上の4つの記述からは二葉亭が既に「手帳14」の段階で、*сердце* (*heart*) という語に執着していたことは明らかだろう。そして、その共通する4語に何の注意も払っていない岩波版全集の訳は、杜撰と言われても仕方ない。

だが、次に問題にされねばならないのは、この仮に「ハート」と訳した *сердце* の意味をどう理解するかどうか。私見によれば、この「ハート」を持つ、持たないということの意味は、これまで自明のこととして扱われすぎてきた。ところが、「ハート」を持つとは、「真心」があるとも、「情熱」があるとも、その意味のとり方次第で、二葉亭の意図はどのようにでも解釈できる面を備えている。そこで、この「手帳14」に最初に現われた「ハート」の意味を考察することから論を進めたい。

すると、まず注目されるのは、この女主人公（雪江）が繰返し*<本能の人>*（VI-396）と規定されていることだろう。そして、一般的に考えれば、*<本能の人>*とは自らの本能、欲望、情熱のままに動かされる人物であり、そのために社会や他人を思いやることの少ない人を指すのではないか<sup>8)</sup>。とすれば、ここで「ハート」を持つとは、他人への配慮よりむしろ自らの生き方を重んずる人の姿勢にかかわっていると考えられる<sup>9)</sup>。

次に、先に引用したロシア語による女主人公の性格づけにおいて、*<ハートを持つ>*の前に *ОДНИМ СЛОВОМ* とあったことを思いおこそう。つまり、この言葉は*<ハートを持つ>* ことが、その前に述べられている事柄の要約であることを示している。とすれば、「ハート」を持つ女性とは、*<情熱的>*、*<しつかりした足取りで前に進むことができる——岩波版全集訳>*女性、同じ「人物」中の別の個所によれば<sup>10)</sup>、*<生活の外的条件だけにしか打ち負かされない——引用者訳>*女性のことだろう。整理して言えば、彼女を打ち負かすものは生活の外的条件だけであって、彼女は因襲とか、既成道徳とか、世間体とかに妥協することのない強い情熱を備えている。そして、「ハート」を持つとは、このことを意味すると考えられる。

ちなみに、この「手帳14」に書かれた『茶筌髪』の「腹案」によれば、雪江は夫をなくしたその悲しみに沈むまもなく、〔宇津伎〕小野夫妻との同居後の*<心の空虚>*（VI-398）からか、友人の夫と不倫の恋におちる。言ってみれば、雪江は一旦夫に心を誓いながらも、その死後、戦争未亡人に対する世間一般の道徳観念にとらわれることもなく、自らの新しい恋をつらぬこうとする。そして、相手の男が自分と他の男性との結婚を勧めたことに*<憤慨>*（VI-398）して、遂に発狂に至るまでの情熱の強さ、すさまじさを備えている。先に述べた「ハート」を持つことの意味は、この「腹案」からも確認できよう。

さて、次に明治38、9年に書かれたと推定される「手帳15」<sup>11)</sup>における「ハート」の意味だが、これは比較的容易に決定できる。なぜなら「梗概」のAは*<Heart アリ>*と同時に*<夢中ニナル>*と書かれているのに対し、B, B, Γ は一括して*<Without heart>*とされ、

更に〈夢中ニナルヌ〉(VI-405)と記されているのだから。従って、二葉亭によれば、「ハート」を持つか持たないかの違いは、夢中になれるかどうかとつながっている。言いかえれば、恋愛におのれのすべてを打ちこめるか否かが「ハート」のあるなしの意味であり、ここからは「真心」、「誠意」といった概念との直接のつながりはうかがえない。

ところが、一般に論者はこの「ハート」の意味を曖昧にしようとする。たとえば、中村光夫氏はおそらくこの「梗概」と現存する断片をもとに、『茶筌髪』という作品を〈「ハートのある」女性である雪江が、ハートのない連中に玩ばれる悲劇であるとともに、ふだんはハートなしで一向不都合を感じない、文学博士の夫妻や大学生たちが、ハートがあり「生きる能力」を持つ、彼等とは異種族の女性に接触して演ずる喜劇でもある〉<sup>12)</sup>と論じている<sup>13)</sup>。だが、もし「ハート」のあるなしが恋愛にすべてを打ちこめるか否かにかかっているならば、その能力は人が恋愛ののっぴきならない現場にさらされた時に明らかにされるもので、〈ふだん〉それなしで〈不都合〉を感じる種のものではないだろう。また、氏の〈ハートのない連中に玩ばれる〉<sup>14)</sup>という表現は、明らかに「真心のない」、「誠意のない」連中という意味を含んでいよう。つまり、ここで「ハート」という語は、明確な根拠を与えられないまま、「真心」、「誠意」といった人間らしく生きるために不可欠な能力<sup>15)</sup>を示すものと理解されている。

もちろん、「人物」の雪江と「梗概」のAと記号化された未亡人がすっかり重なるわけではない。わかりやすい例で示せば、「人物」の雪江は *подавленная только внешними условиями жизни* (VIII-312, 生活の外的条件だけにしか打ち負かされない)と性格づけられていたのに対し、「梗概」のAは *подавленная традиционными предрассудками*<sup>16)</sup> (VIII-315, 伝統的な偏見に打ち負かされた——引用者訳)とされ、こちらは決して既成道徳から自由ではおれない<sup>17)</sup>。従って、「梗概」のAの方が亡くなった夫に対する思いははるかに強いとも考えられる。更にまた、Aは雪江のように〈本能の人〉とされるのではなく、〈実ハ無意識の本能家〉(VI-405), 〈無意識的なニチエ主義者〉<sup>18)</sup> (VI-404)と呼ばれている。つまり、彼女は意識的に既成道徳を破って恋におちるのではなく、恋におちてから自らの正体を知らされるのだ<sup>19)</sup>。そして、〈無意識の本能家〉である彼女は、その恋の最中で〈亡夫、B, 更に世間に対する罪悪感〉<sup>20)</sup> (VI-408)をこえておのれの恋愛をつらぬく情熱の強さを発揮せざるをえない。とすれば、この点における二人の共通性を否定することはできないだろう。両者をつなぐものは何よりもその情熱の強さであり、〈夢中ニナル〉能力だと言えよう<sup>21)</sup>。

だが、残念ながら「手帳15」にはこれ以上「心」、「ハート」といった語は見出せない<sup>22)</sup>。そこで、眼を他に移すと、二葉亭が明治36年頃から翻訳を開始し、明治39年にかけて出版交渉を行ないながらも結局未完で未発表に終わった<sup>23)</sup>ツルゲーネフの翻訳『けふり』(原題 Дым)が注目される。なぜなら、この翻訳が行なわれたと推定される時期は、「手帳14」、「手帳15」が示すように<sup>24)</sup>、『茶筌髪』の構想時期と重なっているのだから。

さて、この『けふり』の中で女主人公イリーナを評した語に *une jeune fille sans coeur* (下線部を英語に直訳すれば *without heart*) というフランス語があるが、二葉亭はこれに〈情の薄い娘だ〉と訳をふったわきに、〈情味のな(い娘だ)〉(IV-360)と並記している。この〈情味〉という語はあまり見慣れない語だが、実は『其面影』の草稿の一つである『心』にこの語が繰返し用いられているのだ。(清水茂氏の推測によれば、この『心』は〈『茶筌髪』

の構想が崩れ出して『其面影』の構想が熟してくる途上で、執筆<sup>25)</sup>されたという。)

『心』において澄子(「梗概」で言う B)は小夜子(同じ草稿の別の個所では君江、「梗概」で言う A)が亡夫武雄が忘れられないと言うのに対して、それは<其面色に顕はれた刹那の情味>が忘れられないという意味で、<其を肉はかりに根ざした事とは謂はぬけれども、其様情味といふものは畢竟真情の影に過ぎぬ>(VIII-68~69)と説く。澄子は更に<情味は年と俱に次第に中に含んだ肉の分子に掩はれて、色の如く褪せて、遂には其跡か尋常の汚点のやうなものになつて記憶に留まるのみで、其情味を今日の儘いつまでも心に留める事は出来ぬ、去る者日々に疎しとは、肉に宿つた真情の影の薄れ行くをいふので、肉を離れた真情の本体に至つては、不來不去、不壞不滅である>(VIII-69)と力説する。つまり、澄子によれば<情味>とは<真情の影>であつて、真の愛から発するものではない。もちろん、澄子がクリスチャンである以上、ここで力説される<真情>は当然信仰とかかわつており、それ故に<情味>と<肉>とのつながりも示唆されるわけだから、先に引用した『けふり』で用いられた<情味>と単純に重ね合わせることはできない。しかし、少なくとも sans coeur を<情味のない>と訳した二葉亭が、その<情味>という語を<真情>と同一視してはいなかった、いやむしろその違いを強く意識していたと考えるのは可能ではなからうか。

とすれば、ここでもまた without heart (sans coeur)という言葉は、「真心」がない、「誠意」がないといった意味とはつながらない。むしろ、「ハート」の意味するものは、人間らしい誠実さとは別に、人の他者になじんでいく気持、他者をいとおしく、離れ難く思う気持とも言えるだろう。これまでの段階の二葉亭にあつて、「ハート」は決して倫理的意味あいを担つてはいない。

ただ、現在残るプラン、草稿類の書かれた正確な日時を確定できないことは、これから先の議論を厄介にせざるをえない。たとえば、西本翠蔭によれば、二葉亭が『茶筧髪』にとりかかっていたのは明治39年5月から8月までで、その<筋書風のもの><sup>26)</sup>はこの時期のものだと言う。(筑摩版全集も現在残る『茶筧髪』と題された未完の小説の執筆時期を明治39年夏と推定している<sup>27)</sup>。)では、この未完の『茶筧髪』と先に触れた草稿『心』との前後関係はどうか、また清水茂氏の推測のように『心』が『茶筧髪』以降のものとしたら<sup>28)</sup>、『心』が書かれたのは、明治39年9月と推定される前述の内田魯庵あて書簡より前なのか後なのか——こうした問題に正確な答を与えるのは容易なことではない。従つて、以下の議論では問題点を簡単に列挙するだけにとどめざるをえない。

草稿『心』で言う「ハート」の意味を十川信介氏は、女主人公の<分裂する心><sup>29)</sup>ととっている。また、氏は内田魯庵あて書簡におびただしく現われた「はあと」の問題に触れながら、<草稿「茶筧髪」の新庄博士は、雪江の友人の夫だが、現在の姉の夫を奪う小夜子の苦しみはそれ以上に強く、何重もの罪におののく彼女の心は、真二つに引裂かれる。「二つ心」以下の予定された題名は、彼女のこの状態をあらわすために考案されたものに違いない><sup>30)</sup>と述べ、この時期の「ハート」が分裂した女主人公の心を示すとの説を提起している。つまり、亡夫を忘れ難く思いながらも友人(姉)の夫にひかれていく彼女の分裂した内面、更にはそれに加えてのいろいろの内面の葛藤を指すと考えている。また、別の個所で氏は<「茶筧髪」系草稿の一、「その面影」><sup>31)</sup>の一節をひいて、『茶筧髪』で雪江が再婚を拒む理由は<彼女の「心」にあつた。夫、故陸軍大尉畑武雄に「誓つたこと」が、彼女の内面を束縛しているのである><sup>32)</sup>と語り、「心」と亡夫を思う気持とのつながりを強調している。

さて、話を内田魯庵あての書簡に戻せば、まず日付のわからない手紙で「はあと」のつくいろいろな題を並べた後に、二葉亭が〈注意 !! 心か三つでもよろし、又一つでも broken heart の意味あらば差支なし〉(VII-347)と語っていることが注目される。では、この〈broken heart の意味〉とは何なのだろうか。これを直訳すれば「こわれた心」、「砕けた心」だから、〈分裂する心〉ともとれる。しかし、この言葉は一般には失恋の痛手のような、「傷心」、「絶望」、「幻滅」などを表わすものだろう（「心くづし」はいくらかそれを暗示しているように感じられる）。だが、もしこの本来の意味にとるとすれば、その主体はもはや『其面影』の女主人公小夜子ではなく、小夜子に去られ、中国にわたって零落する哲也ととるのが自然ではないか。十川信介氏は「其面影」という題名が草稿段階でも用いられ、また決定稿でも用いられていることについて、もともとは女主人公の〈心に残る亡夫の面影〉だったものが、哲也の心の中の〈小夜子の面影〉<sup>33)</sup>に変化していることを指摘したが、これと同じように「心」や「ハート」に関しても、雪江（小夜子）の「ハート」から、哲也の「ハート」への変化がおこったのだろうか<sup>34)</sup>。

実際、前述の手紙を更に読むと、別種の題として〈やれぬおりの〉（〈ギオリノ——伊太利語〉）(VII-347)、つまり「こわれバイオリン」が挙げられている。そして、これには二葉亭自身による挿絵が添えてあるが、そのわびしい雰囲気は小夜子よりはるかに哲也にふさわしい。また、『茶筌髮』の雪江は亡夫の思い出から離れられなかったにせよ、『其面影』では小夜子の亡くなった夫に対する思いは少しも描かれていない。とすれば、「二つ心」を小夜子の分裂する心ととるのは無理ではあるまいか<sup>35)</sup>。

結局、日付なしの内田魯庵あて書簡に並べられた「心」<sup>はあと</sup>の主体は『其面影』の哲也ととる方が自然だろう。だが、この書簡からさほど日を置いたとは思えない（前述の書簡に対して魯庵が返事を送り、それをうけて書かれた）明治39年9月21日の内田魯庵あて書簡はいささか趣を異にしている。そこで二葉亭は「未亡人」と「心」（ハートと読ませる）という題を列記した後、既に引用したように、〈篇中の人物只女主人公のみハートありて其他は皆 Without heart 也〉と語っているのだ。

結論から先に言えば、この記述は明治38、9年に書かれたと推定される「手帳15」の記述とはほぼ一致している（「手帳15」のその個所が書かれた正確な月日はわからないが、明治39年夏に書かれたという『茶筌髮』のプランである以上、少なくともこの手紙よりは何ヶ月か前と推測される）とはいえ、その heart の意味は二葉亭自身の中で多分に変化していると思われる。実際、もしこの書簡の記述が現在の『其面影』の登場人物をさすならば<sup>36)</sup>、その heart の意味をこれまで論じてきたような情熱の強さ、〈夢中ニナル〉能力とは同一視できないだろう。中村光夫氏の言葉を借りれば、〈小夜子は「其面影」のなかで「ハートを持ち」充実した内面を持つ唯一の存在〉<sup>37)</sup>であり、およそ〈本能の人〉と呼ばれるような女性ではない。では、この「ハート」はこれまで否定してきたような倫理的意味あいを持つのだろうか。

だが、ここで注意されてよいのは、Without heart とされる中にクリスチャンの俊子（『茶筌髮』の澄子に近いが、夫を友人にとられるわけではない）が当然含まれていることだろう。西川順一氏は〈俊子は決して他の登場人物と同様の「ハート」なき存在ではない〉<sup>38)</sup>と述べているが、おそらくそれは「ハート」を倫理的概念と結びつけようとする誤解から発していて、これまで繰返し述べてきたように、二葉亭の用いる「ハート」は初めから倫理

的意味あいを欠いている。そして、ここでも俊子が Without heart の一員である以上、依然としてこの語に倫理的価値観は与えられていないと見るべきだろう。

とすれば、この「ハート」はどう考えたらよいのだろうか。ここで敢えて一つの仮説を提起したい。そして、その拠りどころとして、十川氏が『其面影』の哲也について語った次の指摘を引こう。十川氏は言う。小夜子と哲也の恋の＜破局のもう一つの原因は、哲也に求められなければならない。それはいうまでもなく、彼の「精神的支柱を持たぬ」欠点である。これこそ彼を「ハート」のない「生活の不能力者」とし、小夜子との恋を、現実生活の中で「行為」として完結せしめ得ない原因である＞<sup>39)</sup>と。つまり、ここで十川氏は「ハート」の内容を、人生を営む上で不可欠な「精神的支柱」に近似させているのだ。

実際、女主人公の恋の相手が「支柱」を欠いていることは、「手帳14」の「人物」から繰返されてきた。「人物」の Bは、Скептик, не имеющий подпора (VIII-313)＜支柱を持たぬ懐疑家＞(VI-397)と書かれていたし、「手帳15」の「梗概」でも Bは, скептик, не имеет опоры в умственной жизни (VIII-315)＜知的生活では支柱<sup>40)</sup>を持たぬ＞＜懐疑論者＞(VI-404)とロシア語の単語は異なるが、同様の表現で性格づけられていた。

そして、この記述と合わせて『其面影』中で思い浮かぶ箇所は、結末近くで零落した哲也が、中国まで訪れてきた友人の葉村に向かって語る＜僕には昔から何だか中心点<sup>41)</sup>が二あつて、始終其二点の間を彷徨してゐるやうな気がしたです＞(III-379)という言葉ではないだろうか。更にこじつけめいて言えば、哲也はこの言葉の直後に小夜子に関して、＜其処へ行つちや小夜だ。所謂外柔内剛で、口当りは一寸柔いが、心が確りしてゐる、行り出すと極端まで行るです＞(III-379)と述べるが、この＜心＞には「しん」とルビがふられている。即ち、＜心＞は「芯」に通じ、更に「中心」に通じている。そして、英語の heart もロシア語の сердце も等しく「中心」という意味をかね備えている。とすれば、ここで「ハート」を「中心点」あるいは「支柱」と解することもあながち不可能ではあるまい。いやむしろ、「心」に「ハート」という読みを与えつづけた二葉亭のこだわりの底に、「ハート」という語のもつ別の意味がひそんでいたと考えることは自然ではなからうか。

整理して言えば、「手帳14」、「手帳15」の段階で女主人公の「ハート」のあるなしが問題にされたとき、それは恋愛にすべてを打ちこめる情熱のあるなし、＜夢中ニナル＞能力の有無に何よりもかかわっていた。しかし、『茶筌髪』構想が挫折し、戦争未亡人の再婚問題から、未亡人の恋愛問題へと意識を変化させた『其面影』が書かれたとき、＜本能の人＞雪江が、＜しっとりした日本の情緒とハイカラなキリスト教の精神を兼備した理想の女性＞<sup>42)</sup>小夜子に変化するとともに、「ハート」の有無は男主人公哲也に即した問題となって、その意味も「中心点」、「支柱」へと移ったとは言えないだろうか。もちろん、その間に日付のない手紙に見られたように、「ハート」は哲也の「傷心」をも意味したと考えられるが、その間の細かい移り変わりは、草稿類の正確な月日の確定が不可能な現在、詳しく論ずることはできない。ともあれ、「ハート」は一貫して「真心」、「誠実」といった倫理的意味あいを欠いていることは今一度確認できよう。これまでの論者の多くが「ハート」の意味を自明のこととして受けとり、その意味内容の変化を等閑視してきたことは、『茶筌髪』から『其面影』の成立過程の研究の上で、更に雪江と小夜子という二人の女主人公の性格を考える上で、つまずきの石だったと考える。

## 註

- 1) 十川信介「二葉亭四迷論」, 筑摩書房, 1971年, p. 206.
- 2) 同上, p. 222.
- 3) いくつか例を挙げれば, 中村光夫氏は<彼女(雪江——引用者注)を発狂に導くのは, 因襲の圧迫よりむしろ, 「心のない」男の裏切りである以上, 彼女はもはや軍人遺族である必要はなくなりま  
す>と述べている。(中村光夫「二葉亭四迷伝」, 講談社, 1958年, p. 290.) 十川信介氏は<小夜子  
が雪江の血脈を受けついでいることは, 従来指摘されて来たとおりで、その本質的な一致点は、  
彼女たちが、ともに人間らしい「ハート」を持ち、それゆえに人を愛し、それゆえに苦悩すること  
である>(前掲書, p. 208)とか、<大学教師, 文学博士, あるいは宗教家などの, 本来「ハート」  
を持つべきでありながらそれを欠く知識人>(p. 220)とか述べているが、その意味については語っ  
ていない。清水茂氏は<小夜子は、手帳のおぼえ書きにいう「情熱的」(『手帳十四』)で「Heart」  
(『手帳十五』)のある女である>とだけ述べている。(清水茂「後期の二葉亭」, 『日本文学研究資料  
叢書 坪内逍遙・二葉亭四迷』所収, 有精堂, 1979年, p. 271. 初出1958年) 西川順一氏は<「ハ  
ート」とは単なる人情味溢れる心を意味するに止まるものではあるまい>と述べているが、明確な定  
義づけは行っていない。(西川順一「『其面影』の世界——「愛」形象の試みを中心として——」,  
有精堂前掲書所収, p. 298. 初出1974年)
- 4) 参考までに『茶筌髪』と『其面影』の概要を示せば、『茶筌髪』は日露戦争で戦死した軍人の未亡  
人雪江が、相談相手となった友人の夫と不倫の恋に陥る話で、『其面影』は未亡人小夜子が、腹違い  
の姉の夫小野哲也と不倫の恋を結んだ後に、その恋を捨てる話。
- 5) この三語の細かい相違は当面考慮の外におく。
- 6) 中村光夫前掲書, p. 287 など参照。
- 7) Смирницкий, А. И. (ред.) Русско-английский словарь, М., 1965, стр. 46.
- 8) 稲垣達郎氏は「本能主義」を「主我主義」とも呼んでいる。稲垣達郎「『其面影』と『茶筌髪』」,  
「稲垣達郎学芸文集一」所収, 筑摩書房, 1982年, p. 338 参照。
- 9) 西川順一氏の言う<エゴイズムを超克した「愛」の精神>とこの「ハート」は全くかかわりがな  
い。西川順一前掲論文, p. 298 参照。
- 10) ここで雪江は, женщина, страстная, сильная, подавленная только внешними условиями  
жизни (VIII-312) と性格づけられ, 最初の2つの形容詞(страстная, сильная)の共通性から,  
先に引用した記述とオーバーラップするものと考えられる。
- 11) 中村光夫氏は「手帳14」の「人物」と「手帳15」の「梗概」が<おそらく数ヶ月をへだてて書かれ  
た>と推測している。中村光夫前掲書, p. 287.
- 12) 同上, pp. 289—290.
- 13) この論には十川信介氏も賛成している。十川信介前掲書, p. 217 参照。
- 14) この表現は註の3)で引用した<「心のない」男の裏切り>という表現にも近い。
- 15) 註3)に引いたように十川氏は<人間らしい「ハート」>という表現を使っている。
- 16) 岩波版全集のロシア語を2箇所改めた。подавленная→подавленная, Традиционными→Тради-  
ционными
- 17) 中村光夫氏はこの二つの対立する記述を並存するかのよう論じている。中村光夫前掲書, p. 290  
参照。
- 18) 原語は бессознательная нищезанка (VIII-315)。



- 19) 亀井秀雄氏は二葉亭は<当時流行の「本能主義」<sup>ニイチニイスマ</sup>に触発されて、人間のなかに潜む無意識的な自己破滅の衝動をリアライズしてみたかったのであろう>と述べている。亀井秀雄「戦争と革命の放浪者 二葉亭四迷」, 新典社, 1986年, p. 251.
- 20) 原語は чувство виноватой перед покойным мужем, перед Б. и наконец перед обществом (VIII-320)。
- 21) 清水茂氏は「人物」と「梗概」の女主人公を比較して、<ヒロイン (A) の性格が強いもの激しいものからやや「普通」の可憐さに傾いてきている>と指摘している。清水茂前掲論文, p. 266.
- 22) 「場割」と題された筋書に出てくる<内心> (VI-407)の原語は внутренний мир (VIII-318) だし、以下<信仰心>, <復讐心>, <心の底> (VI-408) といった表現にもロシア語の сердце は用いられていない。
- 23) 筑摩書房版「二葉亭四迷全集」第三巻, 解題参照。1985年, p. 697.
- 24) 同上解題によれば、<彼の手帳 (明治37・38年) 中に、短文ながら (『けふり』の——引用者注) 第九章の翻訳草稿が残されている>という。同頁。
- 25) 清水茂前掲論文, p. 268.
- 26) 西本翠蔭「著作に関する計画」, IX-235.
- 27) 筑摩版全集一巻, 1984年, p. 582. また、十川信介氏によれば、明治39年8月7日付の内田魯庵あて書簡で触れている<新聞小説>は『茶筌髪』のことと推測できる。十川信介前掲書, p. 227.
- 28) 十川氏は逆に、『心』を含めた草稿の中で現存する未完の『茶筌髪』を<決定稿>と考へている。同上, p. 212.
- 29) 同上, p. 215.
- 30) 同上, p. 213.
- 31) 同上, p. 228.
- 32) 同上, p. 209.
- 33) 同上, p. 215.
- 34) 十川氏は『其面影』の成立過程に関連して、<作者の力点が、「ハート」を持つ小夜子の、教義と愛情という「二つ心」<sup>はふたこ</sup>よりも、むしろ「ハート」を持たぬ哲也の、愛情と行為、理想と現実という「中心点」<sup>ふたつ</sup>ある性格に移動した>と述べている。同上, p. 221.
- 35) 上に引いたように十川氏は<教義と愛情>とも解しているが、<教義>を「ハート」の一つとすることは唐突で受け入れ難い。
- 36) もちろん、9月下旬に『其面影』全体の構想は確定しておらず、10月10日からの連載中に固まったとも考えられなくはない。
- 37) 中村光夫前掲書, p. 296.
- 38) 西川順一前掲論文, p. 298.
- 39) 十川信介前掲書, p. 219.
- 40) 桶谷秀昭氏は<足場>と訳している。桶谷秀昭「二葉亭四迷と明治日本」, 文芸春秋, 1986年, p. 258参照。
- 41) この二つの中心点が何を指すのかはこれまで意見が分かれている。片岡良一氏は<自我に忠実であらうとする気持と、さうした気持を弱める既存の秩序や道義に拘泥する態度>と述べた (片岡良一「二葉亭と明治時代」, 「近代日本の作家と作品」所収, 岩波書店, 1939年, p. 176) が、十川氏は前述のように<愛情と行為、理想と現実>とし、西川順一氏は<理想と現実の相克というような生やさしいものではあるまい>と主張している。(西川順一前掲論文, p. 295)
- 42) 十川信介前掲書, p. 208.

なお、日本語の引用にあたって旧字体は新字体に改め、ロシア語の引用にあたっては、旧正字法を新正字法に改めた。

また、現在筑摩書房から「二葉亭四迷全集」が刊行中だが、ここで中心的に論じた手帳類の巻はまだ刊行されていない。これが刊行された時には、本稿で指摘した岩波版のいくつかの疑問点が訂正されることを期待したい。